

# 碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

ミュージアムの新しい魅力

63  
2008 July

# 人材育成と科学研究の推進で国際平和に貢献する

## 浅原利正

(広島大学学長)



す大学としての特性をこれまで以上に発揮するとともに、国際的にも通用する教育研究活動を展開することが重要である。

広島大学は二〇〇七年(平成十九年)に「アクションプラン2007」を策定した。これは、変化し続ける社会にあっても未来社会に貢献し、発展し続ける大学として取り組むべき行動計画である。そこ

広島大学は、「自由で平和な一つの大学」という建学の精神と理念五原則(平和を希求する精神、新たな知の創造、豊かな人間性を培う教育、地域社会・国際社会との共存、絶えざる自己変革)に基づき、「社会に貢献する優れた人材の育成と未来社会に資する科学研究の推進」を目指している。広島大学が今後も発展するためには、広島の地に根ざ

では、教育や研究、社会貢献、国際戦略など六項目について目標と行動計画を定めているが、とりわけ注力したのは管理運営体制である。いつまでもなく、大学の使命は教育と研究、そしてこれらを通じた社会貢献である。この使命を果たすためには、何よりも管理運営体制を再構築し、学生支援、教員支援を充実させることが必要である。しっかりと管理運営体制を構築することで、教員は教育・研究・診療活動に専念でき、優れた学生を育成することが可能となる。そのために、特に職員の能力の開発・向上と業務の効率化などには力を注いでいる。

また、社会貢献にも積極的に取り組んでいる。地方の大学と地域は、もともとお互いに支え合う関係にある。それが二〇〇四年(平成十六年)の国立大学法人化を契機に大きく注目されるようになった。大学は、これまでも人材を育成し、科学研究を推進することで社会に貢献してきたが、今後はそれをもとと発展させ、構成員全員で戦略的に展開していくことが必要である。

広島大学は、十一学部十二研究科を擁する総合大学であり、さまざまな分

野ですばらしい研究を行っている。研究の質は研究者数に左右されるものではない。地方大学であっても、たった一人であつても、すばらしい研究成果を生み出している研究者は多い。研究シーズは大都市にのみあるのではなく、全国至る所にあり、その研究シーズが日本の科学技術を成長させ、支えてきたのである。その点で地方大学の力は非常に大きい。科学技術をさらに発展させるためには地方大学の役割を見直すべきである。建学の精神に掲げているように、広島大学は国際平和に貢献することを目指している。二十一世紀の世界は紛争やエネルギー、食料、環境など重要な課題を抱えている。こつした課題を解決するために、大学はその人材育成能力を活かすことが必要である。発展途上国に資金を援助して橋を架けたり井戸を掘ったりするだけでなく、橋を架ける技術、井戸を掘る技術を持った人材を育成し、発展途上国が中長期的に自立できるようにすることも大学の国際貢献であり、重要な貢献として国際平和につながっていくであらう。

広島大学は、社会に貢献する優れた人材の育成と、人類の発展に資する科学研究を推進することで、これからも地域・日本の発展、さらには国際平和の進展に貢献していきたい。

写真：芥川博之



# 碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

# 63

2008 July

## contents

- 3 「羅針盤」 浅原利正 広島大学学長
- 特集
- 1 ニュージニアムの新しい魅力
- 4 地域に密着するニュージニアムの挑戦 澄川喜一
- 7 「うちの美術館」として親しまれる石正美術館 (鳥根県浜田市)
- 8 ボランティアの知識力をフルに活用する大和ミュージアム (広島県呉市)
- 10 古代文化を輝かせる古代出雲歴史博物館 (鳥根県出雲市)
- 12 地域との「接点」を広げる山口県立美術館 (山口市)
- 14 連携して地域の魅力を高める尾道市美術館ネットワーク (広島県尾道市)
- 15 まちづくりの中核機能を担う坂の上の雲ミュージアム (愛媛県松山市)
- 16 「地域に生きる企業家群像」63 株式会社ワンフー 社長 河本弘文 (鳥根県米子市)
- 20 「産学官連携最前線」6 医師不足のなかで地域医療を支える「ミュー太」 (鳥根県)
- 22 「キラリ輝く元気企業」36 プラスチック再生測量杭で国土インフラを支えるリプロ (岡山市)
- 24 「シリーズ」21世紀をリードする企業団地 8 竹原工業・流通団地 (広島県竹原市)
- 25 「STOP! 地球温暖化」2 NPO法人日本古民家研究会 (鳥根県松江市)
- 26 「夢紡人/ゆめつむぎびと」59 白松博之 (山口県阿武町)
- 29 「佳味彩々」8 津田かぶ (鳥根県松江市)
- 30 「庭園逍遥」8 頼久寺庭園 (岡山県高梁市)
- 32 「工芸の旅」8 因久山焼 (鳥根県八頭町)

表紙写真：大和ミュージアム・10分の1戦艦「大和」写真：芥川博之(広島市在住)  
目次写真提供：鳥根県芸術文化センター、鳥根県立古代出雲歴史博物館、山口県立美術館  
表紙デザイン：久原大樹(広島市在住)

\*本誌は再生紙を使用しています。

# 地域に密着するミュージアムの挑戦

澄川喜一

文化芸術に力を入れている日本では、ミュージアムも素晴らしい作品を展示するだけでなく、地域での感性教育の場、まちづくりの拠点という機能を果たすことが必要である。そのためには、ミュージアムと市民、そして行政が協働して地域文化を育ていくことが求められている。



グラントワ・益田市・市民が協働して開催した「室町文化フェスティバル」

## ミュージアムの草創期をリードした森鷗外

島根県津和野町に生まれた森鷗外はさながら明治のマルチ文化人であった。『舞姫』や『高瀬川』、『山椒大夫』などで知られる明治の代表的な文豪であり、軍医でもある。そして、意外に知られていないのが、日本におけるミュージアムの草創期をリードしてきた人物ということだ。鷗外は一九一七（大正六）年には帝室博物館の初代総長に、一九一九（大正八）年には帝国美術院の院長に就任している。帝室博物館は天皇家のコレクションを収蔵することを目的としており、東京・上野にある東京国立博物館の前身である。また、帝国美術院は芸術上功績顕著な芸術家を会員とする日本芸術院の前身だ。

鷗外は一八八四（明治十七）年に欧州に渡航し、オペラや美術作品などを頻繁に楽しみ、現地の文化芸術と深く接していた。当時の日本にとって近代国家の仲間入りを果たすことは最優先の課題であったが、そのためには日本の文化を世界に発信することが必要不可欠である。そこで、欧州の文化芸術に造詣の深い鷗外を帝室博物館の総長に任命することで、欧州でも高い評価が期待される国内の作品をピックアップし、欧州に紹介しようとしたのである。

## 感性教育を基盤とした日本のミュージアム

明治維新以降、日本は近代国家を目指して近代化を急ピッチで進めていたが、とりわけ力を注いだのは人づくり、すなわち人材の育成であった。国づくりは人づくりであるという「哲学」が明治政

を展示するとともに、郷土ゆかりの作家たちの作品を収蔵展示することにより、地域の文化を再評価し、全国に発信していた。

戦後から六十年以上の歳月が過ぎ、この間、日本は文化芸術に力を注いできたが、それとともにミュージアムも新しい機能を果たすことが求められている。それは、「地域での感性教育の場」という機能であり、「地域のまちづくりの拠点」という機能である。

それは、これまでのミュージアムの機能とは大きく異なっており、当然ミュージアム側にも戸惑いは生じているであろう。しかし、そうした新しい機能に挑戦しているミュージアムが島根県にある。それが、島根県益田市に二〇〇五（平成十七）年に開館した島根県芸術文化センター「グラントワ」だ。

グラントワは四つの展示室で構成される美術館と、大小二つのホールで構成される複合施設である。愛称は地元石州瓦を使った外観から「大きな屋根」グラントワ」と名づけられた。

## 地域密着型ミュージアムを目指す

グラントワのある益田市の人口は約五万二千人である。一般的にミュージアムを運営するためには三十万人以上の人口

府にはあつた。それを中心的に牽引したのは長州藩である。

明治初期の人づくりでは技術と美術に重点が置かれた。鎖国によって他の諸国から大きく遅れていた技術「テクノロニー」を向上させるとともに、美術「感性も高めよう」と考えたのだ。そこには、人づくりには技術と美術の両立が不可欠であるという明治政府の考えがあつた。

そのために一八七三（明治六）年には工学校（後の工部大学校）が、一八七六（明治九）年には工部美術学校が創設された。工学校は東京大学工学部の、工部美術学校は東京藝術大学の前身である。技術力を高めるには工学だけでなくデザインが必要である。そのデザイン力を支えるのは美術であり、感性である。

そうした感性教育の上に構築されたのが日本のミュージアムである。国内外のすばらしい作品に接することで感性を高め、それによって人づくりを進めようとしたのだ。

## 地域での感性教育の場、まちづくりの拠点

第二次世界大戦後、国民の生活が豊かになってくると、日本でも世界のすばらしい作品が展示されるようになり、人々もフランスのルーブル美術館をはじめとした世界的なミュージアムに足を運んで世界的な名作を鑑賞するようになった。

こうした国民の文化芸術に対するニーズに添えていったのがミュージアムであり、そのため全国各地にミュージアムが開館した。各地のミュージアムはすばらしい作品

が前提とされる。したがって、五万二千人の小さな都市でミュージアムを運営するためには新しいことに挑戦し続けることが重要となる。他のミュージアムと同じことを行うのは決して賢明な選択ではない。先行者の轍に入ってしまうと、そこから抜け出すことは難しい。むしろ、小さな都市のミュージアムとして新しい轍をつくっていくと考えたのだ。

そこでグラントワが開館当初から掲げたのが地域密着型のミュージアムである。地域密着型のミュージアムとは、すばらしい作品を展示紹介するだけでなく、地域の伝統芸能である石見神楽を上演したり、落語を聞いたり、地域の祭りや市民中心のファッションショーを開催したりすることで、地域の人たちが思わず行きたくなくなるような「敷居の低いミュージアム



六日市町（現在は吉賀町）出身の森英恵さんによるファッションの講演会も開催された。

である。そこは、美と接する空間であるとともに、子どもから親、そして高齢者までがいつでも楽しめる感性教育の場でもある。

グラントワはこうした地域密着型のミュージアムを目指して活発な活動を展開してきた。もちろん、世界的な指揮者小澤征爾氏を迎えての演奏会や高円宮家所蔵展、さらにはウィーン展といったトップクラスの企画も展開した。こうした演奏や展示に接することは非日常的な世界としてすばらしいことである。その一方で、地域の生活に密着した石見神楽の定期公演も開催してきた。その結果、人口五万二千人の小さな地方都市のミュージアムでありながら、開館二年余で百万人目の入館者を迎えた。



グラントワの中庭で上演される石見神楽

## 市民と一緒に企画・実行する グラントワ

こうした実績をベースに、グラントワでは次の段階として市民と一緒に企画・実行することを目指している。その一環が、今年の四月からグラントワを中心に繰り上げられた「室町文化フェスティバル」だ。これは、美術館で開催される国立音楽堂コレクション展を中心に、室町時代という切り口からさまざまなイベントを展開したものである。

益田市は中世・室町時代に栄えた街であり、市も「中世の街」をコンセプトとしたまちづくりに取り組んでいる。そこで、ミュージアムと市、さらには市民が協働し、三人四脚で事業を展開した。

三人四脚は足並みが揃うとスピードは速くなるが、足並みを揃えるのはなかなか難しい。しかし、こうした取り組みを継続的に続けるなかで、本場に地域に密着したミュージアムに育っていくのである。その歩みを「こうして重ねているのがグラントワなのだ。それは、これまでのミュージアムにはない新しい姿でもある。

## 地域から実現する グラントワの新しい可能性

グラントワの新しい挑戦としてもう一つ挙げられるのが、周辺のミュージアムな

どとの連携を深め、広域的な「美術回廊」を形成していることだ。ミュージアムはとかく自分たちの企画展示だけに目を向けがちであるが、益田市を含めた石見地域では、「いわみ美術回廊」を結成して、ミュージアムを訪れたお客様には他のミュージアムの企画展示なども紹介している。そうすることで石見全体の魅力を高めようとしているのだ。

こうした新しい取り組みは石見地域だけでなく、これからは中国地方全体で取り組むことが必要である。そのためには中国地方のミュージアムがそれぞれ足固めをし、手を携えることが求められる。

ミュージアムは確実に新しい時代を迎えており、いかに地域と密着できるかが大きなポイントとなっている。そのときに重要なことは市民が主体的に企画に参



石州瓦の外壁と照明が魅力的な空間を創出するグラントワ

## 特集 ミュージアムの新しい魅力

# 「うちの美術館」として

## 親しまれる石正美術館

《島根県浜田市》

### 石見から新たな文化を 全国に発信

日本海に面した島根県三隅町（現在の浜田市三隅町）の小高い丘の上に石正美術館がオープンしたのは二〇〇一（平成十三年）である。イタリアの小さな教会を思わせる、こぢんまりとした美しい美術館だ。石正美術館は日本画家石本正（本名は正）氏の作品を収蔵する個人美術館である。石本氏は一九二〇（大正九）年に岡見村（現在の浜田市三隅町岡見）で



中庭の桜の下で開かれた、地元の人たちによる演奏会

へてを無償譲渡することにも、石見から新たな文化を全国に発信する拠点にして欲しいという「意思」も伝えていた。石本氏は常に新しいテーマを追い求めて新作を発表し続けており、これまで過去の作品を展示することはなかった。しかし、自分の作品を後世に

残すとしたなら、それは自分が生まれ育った故郷三隅町しかなかった。また、作品は鑑賞者の心を打つかが大切であり、作家の名前などは不要であるという信念も抱いていた。そのため、美術館の名称もあえて「石本正」ではなく、「石正」とした。

## 地元の人が主役の ミュージアムパフォーマンス

こうした石本氏の信念を貫くために石正美術館はさまざまな取り組みを展開しているが、特に力を入れているのが石見からの文化発信である。石本氏にとって幼い頃の故郷の思い出は絵を描き続ける「原動力」であり、石見は心豊かな地である。そんな地域の豊かさを地元の人たちで共有し、新しい文化を育て発信していくことというのだ。

「美術館に足を運ぶことでいろいろな文化に接し、それが心の豊かさにつながるようにしたいと考えました」

こう語るのは神英雄主任学芸員である。そこで企画したのは週末のミュージアムパフォーマンスだ。これは、週末にフルトや尺八、大道芸、舞踏などの地元「名人」の演奏会や発表会を開催するものだ。

ミュージアムパフォーマンスは開館した年からスタートし、七年間で三百二十二回

画し、さまざまなアイデアを提起していくことだ。それが文化芸術に新しいインパクトを与える。

昨年には大田市の石見銀山が世界遺産に登録され、中国山地を源流とする高津川が国土交通省の調査で水質日本一に選ばれた。こうした「資源」をいかに活かすかは市民の力にかかっているが、そこでミュージアムが果たすべき役割は決して小さくはない。ミュージアムの展示機能を活用して、その魅力をさらに高めることも可能だ。その意味で、ミュージアムはまちづくりの「拠点」としての機能も期待されている。

島根県の小さな地方都市に誕生したグラントワは、新しい文化施設の可能性を模索しながら、地域の魅力を高めようとしている。そこでのミュージアムと市民、そして行政の挑戦は新しい時代の文化施設の姿を示唆しているといえる。

### profile

#### 澄川喜一 すみかわきいち

1931年島根県六日市町（現在は吉賀町）生まれ。日本芸術院会員、元東京藝術大学学長、島根県芸術文化センター長。東京藝術大学専攻科を修了後、東京藝術大学教授、美術部長を経て、95年に学長に就任。この間、『平櫛田中賞』、『吉田五十八賞』など多くの賞を受賞している。

を数えている。しかも、学芸員が出演を依頼することはまったくなく、サポーターの協力などで次から次へと出演者が登場している。

「主役は地元の人です。地方の公立美術館の使命は、本物のすばらしさを伝えること、住民が持っている文化を発信し、地域文化創造のエンジンになることだと思います」と、神主任学芸員は言葉が続けた。出演者の中には、自分のホームページに「ホームフラウンドは石正美術館」と書き込んでいる人もいるという。

## 「敷居のない美術館」として 地域文化を創造

美術館の廊下を利用した市民キャラリも大きな役割を果たしている。「ここでなく、一つの美術作品として展示するために、市民と学芸員、サポーターが協力して展示作業を行っている。そこには作品は作者の名前ではなく、鑑賞者の心を打つかが大切だ」という石本氏の「精神」が脈々と伝わっているようだ。

市民から「うちの美術館」と親しまれている石正美術館は、作品に表現された作家の「魂」と出合うことを大切にしながら、地域とのつながりを深め、「敷居のない美術館」として地域文化を創造する役割も果たしている。

# ボランティアの知識力をフルに活用する 大和ミュージアム

《広島県呉市》

戦争の悲惨さと平和の大切さ、そして科学技術のすばらしさを伝える大和ミュージアム。そこでは学芸員顔負けの知識をもったボランティアが活躍し、ミュージアムの魅力を高めている。



大和ミュージアムのシンボルともなっている10分の1戦艦「大和」(写真:芥川博之)

ミュージアムのシンボル  
十分の一戦艦「大和」

広島県呉港に隣接した大和ミュージアム。そのシンボルとなっているのが戦艦「大和」の十分の一模型である。全長二六・三m、最大幅三・九m、重さ二九トン。造船所で本物の船として建造され、そのスケールの大きさには誰もが圧倒される。戦艦「大和」は一九四二(昭和十六)年に竣工した、当時世界最大の戦艦である。しかし、その後「大和」の威力を発揮できるような戦況はなく、主に後方で指揮をとっていた。一九四五(昭和二十)年四月六日、米軍の沖縄上陸阻止作戦のために呉より出港したが、翌日、九州南西沖で約三百八十機に及ぶ米軍戦闘機の攻撃を受け沈没した。乗組員三三三三名中三〇〇名余りが戦死し、悲劇の戦艦として知られている。

## 開館三年で来館者 延べ四百万人を突破

大和ミュージアムは二〇〇五(平成十七)年四月に開館した。正式名称は呉市海事歴史科学館である。それから三年後の二〇〇八(平成二十)年五月十日には来館者数延べ四百万人を突破した。地方にある中規模博物館としては破格のストロドである。それほどに、人々を

スタントに確保するという意味では簡単ではない。

それをね返しているのが「ボランティア」である。ある人が「大和ミュージアムに行つて良かった」と十人に話せば、その中から「それなら、今度、私も行つてみようかな」と思う人が増える。そのように周りの人に「ボランティア」と呼んでくれる人を「拡大再生産型ボランティア」と呼んでおり、そうした人々を増やすことで来館者を確保したいというのが大和ミュージアムの手法である。

開館から三年が過ぎ、四百万人の来館者を記録した大和ミュージアムは、展示内容とともに、ボランティアが大きな魅力となり、さらに多くの来館者を迎えるようになっている。

ひきつけることができたのはなぜだろうか。

館長の戸高成さんは「事実を淡々と展示することに徹したことが受け入れられたのではないかと分析している。

大和ミュージアムの建設には十年余りの歳月を要した。理由は「戦艦を展示する博物館イコール戦争を肯定するといったイメージになるのではないかと懸念する声があり、大和ミュージアム建設に賛否両論があつたからだ。そうした議論の中で、「歴史を正しく認識するための一つのきっかけとしての存在に徹する」というのが、大和ミュージアムの意義であるとの結論に達した。だから、展示品も淡々と陳列しているし、一見そつけないほど事務的な説明文を記すにとどめている。



人間魚雷ともいわれた特攻兵器「回天」

「大和ミュージアムという十分の一模型の印象が強いですよ、あれはあくまでシンボルです。実際は、レングスの展示があるように、とても地味で目を引くようなお宝はあまりありません。しかし、

たつたのレングスが当時の歴史的背景や技術力、文化などさまざまなことを伝えているというところを来館者感じてもらえるような博物館にしたつもりです」(戸高館長)

## ボランティアの知識力を重視

大和ミュージアムでは、毎日十名ほどのボランティアが館内の至る所に待機しており、尋ねれば学芸員顔負けのさまざまなエピソードを教えてくれる。

「このボランティアの方々は、皆、ていねいな研修を受けた人ばかりだ。歴史と



青いジャケットを着て一生懸命解説するボランティア

技術の博物館という性格上、来館して、技術のすばらしさを、どんなにすばらしい技術でも使い方を誤れば悲劇となること、そんな歴史を繰り返してはいけないことなどを感じてもらうことが大切である。そのためにも、来館者に相応の背景を詳しく理解してもらつて必要があるからだ。

現在、登録者数は八十五名。当初は百名以上の応募があり、現在でも年に一回の新規募集には十名ほどの応募があるという。また、ボランティアの方に元エンジニアや元教師など歴史や技術と深い関わりを持つていた人が多いのも特徴だ。自分の専門的知識を生かしたい。そういう気持ちの方も多いという。そのためか、リピーターの中には、「さんにまた説明してもらいたい」と指名してくる人や、お礼の手紙に「ボランティアの さんには、とても良くしてもらいました」といった一文を添える人も多い。

## 拡大再生産型 リピーターを増やす

大和ミュージアムの来館者の約七割は県外である。東京より西の地域の府県では、どこの地域からも均等に訪れているし、なかには北海道や沖縄からの来館者も少なくない。遠方より訪れてくれるのは非常にうれしいことだが、来館者を「リ



ミュージアムには全国から多くの来館者が訪れている。

# 古代文化を輝かせる古代出雲歴史博物館

《島根県出雲市》

大きな地域資源である歴史文化を世界に発信する古代出雲歴史博物館。

弥生時代の国宝が数多く並ぶ博物館では、他のミュージアムとの連携を深めながら、古代文化の輝きを現代によりみがえらせている。



博物館内に展示されている平安時代の出雲大社の模型

## 世界に誇る 島根県の歴史文化

「縁結びの神様」として全国に知られる島根県出雲市の出雲大社。特に今年から「平成の大遷宮」の準備が行われていることもあって、訪れる観光客数も増加している。今年四月に挙行された仮遷宮は、大神様が御本殿から御仮殿に遷られる祭典で、それに伴って御本殿が開かれ、その内部を拝観できる、六十年に一度の機会である。

その出雲大社から徒歩約五分の場所に、二〇〇七（平成十九）年三月、島根県立古代出雲歴史博物館が開館した。設計は日本の代表的建築家として知られる槇文彦氏で、出雲大社と同じ北山山系を借景とし、庭園とともに景観に溶け込むような建物となっている。

島根県にとって歴史文化は大きな地域資源である。一九八四（昭和五十九）年に斐川町の荒神谷遺跡から出土した

## 博物館や遺跡などの ネットワーク

このように古代出雲歴史博物館は充実した展示品を中心に活発な活動を展開しているが、その一方で周辺の博物館や遺跡等とのネットワークにも力を注いでいる。

「古代出雲歴史博物館だけで古代出雲の歴史文化がすべて理解できるものではありません。この博物館で理解を得るためのきっかけをつかんでいただき、周辺の博物館や史跡などを回ることでより深く理解していただきたいと考えています」と、松本学芸部長。

そのために、県内にある五十五のミュージアムと連携して、古代出雲歴史博物館の押印のある観覧優待券またはミュージアムパスポートを提示すれば他のミュージアムの観覧優待が、他のミュージアムの観覧優待券を提示すれば古代出雲歴史博物館の観覧優待が受けられるようにしている。



加茂岩倉遺跡から出土した銅鐻

弥生時代の銅剣はそれまでの全国の銅剣出土総数三百本を凌駕する三百五十八本であり、一九九六（平成八）年に加茂町（現在は雲南市）の加茂岩倉遺跡から出土した銅鐻は全国最多の三十九個であった。また、全国唯一の完本として残る『出雲国風土記』や出雲神話、出雲大社の歴史と信仰など、島根県の歴史文化は世界に誇る最大の「資産」であるといえる。

## 広がりのある 古代出雲文化圏の調査研究

この豊かな歴史文化と遺産の特性を県民が十分に認識し、その恩恵に浴しながら、そのことを「島根県の良さ」として国内外に向けて発信する拠点となるのが古代出雲歴史博物館である。

「古代文化という言葉は、時代区分だけでなく、現代文化のバックボーンとなっている基層文化も含んでいます。また、古代出雲という言葉は、現在の出雲地方

## 力を入れている

### 児童生徒の歴史学習

児童生徒たちの歴史学習にも積極的に取り組んでいる。歴史系博物館といつとどうしても専門用語が多く、児童生徒にはなかなか理解できない点も多い。そこで古代出雲歴史博物館では学芸員が中心となって『活用の手引き』を作成し、県内の学校に配布している。これは、学校との連携を進めるため、学校の先生たちからのアドバイスを受け、施設の概要紹介だけでなく、学習指導案や活用案も掲載したガイドブックである。こうした普及活動によって、これまでに百六十校以上から約一万人の児童生徒が入館した。近隣の鳥取県や広島県はもとより、遠く東京から修学旅行で訪れた高校もある。

古代出雲歴史博物館ではせっかくの機会を大切にするために、見学だけでなく、学芸員による講座や体験学習なども提供している。特に、体験学習は敷地内にある体験工房を使って土器の製作や玉作、藍染めなどを行うものだ。

豊かな歴史文化に恵まれた出雲の地に開館した古代出雲歴史博物館は、県内のミュージアムと連携しながら、現代につながる古代文化をさらに輝かせている。

色の大刀」の三つのテーマで展示が行われている。

と、限られた地域ではなく、北陸までの日本海の西部という広域圏を意味しています。したがって、日本海をさんで深い交流のあった東アジアの歴史文化も視野に入ります。こうした広がりのある文化圏の調査研究を行い、日本だけでなく世界に情報発信しようというのが古代出雲歴史博物館です」と、松本岩雄学芸部長は博物館名に込められた意味を説明してくれた。

## 弥生時代の 多くの国宝が並ぶ展示室

古代出雲歴史博物館は主にテーマ別展示室と総合展示室、特別展示室で構成される。二〇〇〇（平成十二）年に出雲大社境内で発見された宇豆柱が展示されている中央ロビー。その左手にあるのが常設展示のテーマ別展示室だ。ここでは「出雲大社と神々の国のまつり」、「出雲国風土記の世界」、「青銅器と金



銅剣と銅鐻の展示室はまさに「国宝の部屋」である。

弥生時代の国宝には全国で六件四百八十四点が指定されているが、今回の銅鐻の指定により、そのうちの八割（四百十九点）が古代出雲歴史博物館の「青銅器と金色の大刀」のコーナーに展示されていることになる。まさに、この展示室は「国宝の部屋」ともいえる。

一方、総合展示室では、島根県の人々の生活と交流をテーマに、古代から近現代までの島根県の通史を紹介することもに、四隅突出型墳丘墓、古代出雲の玉作、たたら製鉄、石見銀山という特徴的なテーマを展示している。また、特別展示室では、原則として年間一本の企画展と一本の特別展を開催している。このうち企画展は、島根県古代文化センターが三年間にわたって研究してきた成果を発表するもので、今年の十月からは「秘仏への旅 出雲・石見の観音巡礼」、来年三月からは「出雲の玉と古代国家の誕生（仮）」を開催する。

# 地域との「接点」を広げる 山口県立美術館

〈山口市〉

代表的な水墨画家である雪舟が才能を開花させた山口。

それを地域の魅力として深く認識するために、美術館は研究・展示活動を活発化するとともに、斬新なイベントなどを通じて地元商店街とのつながりも深めている。

## 室町時代を代表する 水墨画家雪舟

室町時代、山口の大内氏は中国や朝鮮との貿易で大きな富を築くとともに、その財力を活かして文化の振興や都市づくりなどを行った。そのため、大内氏を慕って多くの文人や禅僧が山口に集まり、やがて山口は「西の京都」とさえ言われるようになった。

そうした文人の一人が、室町時代を

代表する水墨画家雪舟だ。雪舟は岡山で生まれ、京都の禅寺相国寺で修行をした後、三十五歳ごろに山口に移り住んだ。それから約半世紀にわたって山口を拠点とし、その間、日本人の画家としては初めて中国に渡り、本場の水墨画を学んだ。そして、帰国後も日本中を旅して多くの作品を残した。

まさに、水墨画家雪舟と山口は切っても切れない関係にあるのだ。そうした地域にあるミュージアムとして雪舟をテーマ

に積極的な研究・展示活動を展開しているのが山口市の山口県立美術館である。

## 山口に関わりの深い テーマを研究・展示

一九七九（昭和五十四）年に開館した県立美術館は、主に企画展示室と常設展示室で構成されている。このうち常設展示室は県立美術館のコレクションを展示するスペースで、大小五つの部屋に分かれている。その中の二室である香月泰男

室には、主に、県出身の洋画家香月泰男氏の代表作「シベリアシリーズ」が、また小林和作室では洋画家小林和作氏の作品に加えて山口県に関わりのある作家の作品が展示されている。

県立美術館は開館当時から地域に関わる企画展示を行っていたが、雪舟をテーマとした企画展を行うようになったのは、一九八四（昭和五十九）年に行つた雲谷等顔の企画展からであった。雲谷等顔は、雪舟のアトリエである雲谷庵を継いだ画家で、萩藩御用絵師・雲谷派の祖でもある。この雲谷等顔にスポットをあてた企画展は全国でも初めてで、全国から注目を集めた。

「この企画展に代表されるように、そのころから雪舟や大内文化、雲谷派といった山口と関わりの深いテーマを基軸にした研究を積極的に展開していこう」という機運が高まってきました」と、県立美術館の河野通孝普及課長は説明してくれた。

そして、一九九六（平成八）年には雪舟の専門的研究の中心となることを目指して美術館内に「雪舟研究会」が組織された。この研究会には全国から五名の専門家が参加し、十年間にわたって調査を行い、研究内容を紹介する研究紀要も定期的に発行した。それは同時に、県立美術館がより地域文化との関わりを深めていく契機でもあった。



農とアートをテーマとしたアグリ・アート・ツーリズム (写真提供：山口県立美術館)



一の坂川の上にかげられた3つのスクリーン (写真提供：山口県立美術館) (左ページも)



身近な美術館を目指す山口県立美術館

## 地方では画期的な 雪舟の企画展

雪舟研究会は、地道な調査研究を積み重ね、とかく画聖というイメージで描かれる雪舟の実像に迫り、「在野の個性豊かな画家」といった新しい人物像を明らかにしていった。この十年の研究成果をもとに開催したのが、二〇〇六（平成十八）年の特別企画展「雪舟への旅」だ。この企画展は県立美術館単独の企画展であったが、国宝となっている雪舟の作品六点をすべて展示し、三十日間十万人が入館するという、地方の美術館では画期的な企画展となった。

「企画展には、山口で才能を開花させた雪舟を再認識し、雪舟イコール山口というイメージをつくってほしい」という狙いがありました。その点では、地元の人たちが抱いている雪舟のイメージに少なからず

刺激を与えたと思えますが、その意識を醸成するとともに、より多くの人たちを巻き込んでいくために、引き続きさまざまな取り組みを行いました」と、河野課長。

そこで、子どもたちに雪舟を知ってもらうための「雪舟カタログ」や学校の先生たちが授業に使える副読本を作成し、常設展示室にも雪舟と雲谷派の作品のコーナーを設けた。それとともに、雪舟研究会の研究成果や実績をもとに、雪舟を基軸として中世の山口や大内文化をもう一度見直そうという「雪舟センター」設立の動きも生まれている。

## 美術館と地域が 一体となった ミュージアム・アート

県立美術館は雪舟以外でも地域との関係を深める取り組みを行っている。そ

れが二〇〇七（平成十九）年に開催した「ミュージアム・タウン・ヤマグチ2007」だ。

県立美術館では毎年山口県美術展覧会を開催しているが、美術展覧会の内容をさらに充実させるためには地域とのつながりをより太くし、もつと地域の応援を得ることが必要だ。そこで、地元の商品街や県立大学などと一緒に関画したのが「ミュージアム・タウン・ヤマグチ」である。

六十一回目を迎えた美術展覧会を軸に、「もつくり」と「コミュニケーション」をテーマとした二十二のワークショップや参加型イベントを実施し、中心市街地を

「アートと日常生活が交錯する「空間」にしよう」というものだ。県立美術館の前庭では作家たちがフリーマーケットを開店し、商店街では豆腐のパック七千個を集め、モルタルを詰めて作った「豆腐ブロック」で小径を舗装するといったイベントを開催した。また、商店街の空き店舗はギャラリーに変身し、三展覧会を開催するカフェも登場した。まさに、美術館が街に飛び出し、街が美術館になつていくようなイベントだ。

「美術館としては、美術展覧会で育ててきた作家たちを地元の人たちに紹介するいい機会となりましたし、地元の人たちにとっては美術館がより親しみやすい存在になつてきたと思います。こうした活動を展開することで、美術館と地域との関係をより深め、地元の人たちにとつてもっと身近な美術館にしていきたいと考えています」と、河野課長。

県立美術館は雪舟から街へと地域との「接点」を広げながら、地域と一緒に文化を創造発信し、地域の魅力を高めたいという思いがある。



壁を塗り、豆腐のバックでブロックをつくり、それを敷き詰めて完成した小径 (写真提供：山口県立美術館)

# 連携して地域の魅力を高める

## 尾道市美術館ネットワーク

《広島県尾道市》

### 六館が連携して 芸術・文化の情報を発信

広島県の代表的な観光地である尾道市。そこで昨年発足し今年から活動を始めたのが、市内の六つのミュージアムが

情報を共有し、共同でイベントを行う「尾道市美術館ネットワーク」である。公立民間、宗教法人といった垣根を越え、純粹に芸術を愛し文化を普及させることを目的としたネットワークだ。そのためチーム内の肩書きは一切なく、しかも新人、ベテランに関係なく同じネットワークの一員として参加している。

契機となったのは、平成の広域合併により各市町内にあった美術館や博物館が尾道市となったことだ。しかし、尾道市民の中には六館すべてを知らない人もいる。そこで、市民や観光客にそれぞれの特色をアピールする目的で立ち上げた。

また、各館は彫刻、絵画、オブジェといったように、それぞれ所蔵作品が違うため、学芸員の知識も偏ってしまいがちである。そこで、企画やイベント、打ち合わせによる情報共有を頻繁に行うことで、各学芸員の知識の幅を広げたいという狙いもあった。

### 来館者アップを狙い 芸術文化のすそ野を広げる

ネットワーク設立の背景にはもう一つ深刻な問題があった。ここ数年、美術館入館者が年々減少傾向にあるのだ。各館では、個性を活かし、趣向をこらした展覧会を企画開催し、課題に取り組んでいるが、単館では限界もある。こうした美術館・博物館離れに歯止めをかけるには、美術館・博物館をもっと身近に感じてもらう、芸術や文化への興味を持つ人を増やすことが先決である。そうした観点からも、共同で情報発信を積極的に行い、市民や観光客を巻き込んだイベントを仕掛けていくということになった。

現在の主な活動は、六館の特色や展示スケジュールなどの情報を紹介したインフォメーション・マップ作成のほか、「子どもを対象とした教育普及活動」、「タペのコンサート」、「六館共同での作品募集」などである。

動き始めたばかりだが、さらに各館の連携を密にして、各館の作品を持ち寄るの特別企画展や市民作品の展示スペースの拡大など、今まで美術館や博物館にはあまり興味がなかった人でも気軽に参加できるようにしたい考えだ。

またたく個性の違う六館をいかに上手



千光寺から望む尾道の町並み（写真提供：尾道市）

# まちづくりの中核機能を担う

## 坂の上の雲ミュージアム

《愛媛県松山市》

### 文学作品をコンセプトとした ミュージアム

「春や昔 十五万石の 城下かな」という正岡子規の俳句で始まる小説『坂の上の雲』は、作家司馬遼太郎の大作である。ここでは、愛媛県松山市出身の秋山好古、真之兄弟と正岡子規の三人の生涯を通して、近代国家として成長していく明治の日本の姿が描かれている。

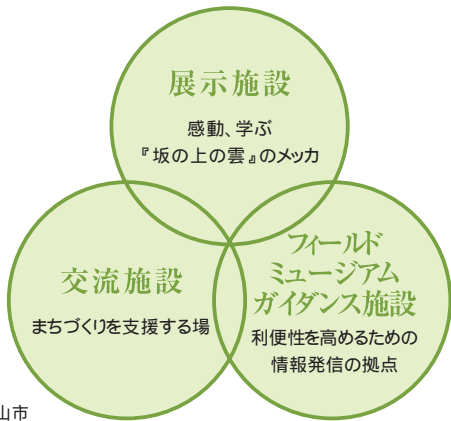
この作品を基本コンセプトとして、二〇〇七（平成十九）年四月に開館したのが松山市の坂の上の雲ミュージアムだ。文学者ゆかりのミュージアムは全国にいくつもあるが、文学作品をコンセプトとしたミュージアムはほとんどなく、その意味でも新しい試みとして注目されている。

坂の上の雲ミュージアムの設計は日本の代表的建築家安藤忠雄氏によるもので、二つの三角形を重ね合わせた「T」状な建物だ。館内の各階は三角形を描く

スロープでつながっており、来館者は展示室をゆっくり回遊しながら、明治という時代をじっくり考えられるようになっている。

館内は主に、展示室と企画ギャラリー、手で触れることができるハンズオン展示、小説のあとがきのシンボル展示で構成されている。まずは、『坂の上の雲』とその時代」をテーマに、近代国家へと歩み

「坂の上の雲ミュージアム」の機能



図：松山市



安藤忠雄氏の設計による坂の上の雲ミュージアム

### 市民主体の まちづくり活動の「拠点」

始めた明治時代を年表や資料、映像などで紹介している。また、この施設では、毎年一つのテーマで企画展を開催しており、今年の三月末までの第一回では、「子規と真之」が、四月からの第二回では、『坂の上の雲』10000人のメッセージ展」が開催されている。

坂の上の雲ミュージアムは開館以来多くの来館者にぎわっているが、注目され

く組み合わせる新しい魅力を引き出していくのか。全国でも珍しい試みだけに、その動向が注目されている。

ネットワークに加盟しているミュージアム	
丸 鰐 記 念 館	みつば 御調町出身で文化勲章受章の彫刻家圓鰐勝三の作品を集めた彫刻の美術館。
な か た 美 術 館	地元企業(株)ナカタ・マックコーポレーション運営の私立美術館。回遊式日本庭園には彫刻も点在。
尾 道 市 立 美 術 館	建築家安藤忠雄氏設計で、2003年にリニューアルオープン。今年生誕120年を迎える小林和作や森谷南人子など、尾道を題材にした郷土の画家の作品を所蔵。
平 山 郁 夫 美 術 館	日本画家平山郁夫氏の生誕地・生口島にあり、幼少期から最新作までを展示。
耕 三 寺 博 物 館	1952年、耕三寺耕三が母のために建てた博物館。耕三寺耕三が収集した重要文化財を含む2,000点もの美術品を展示。
尾道白樺美術館[尾道大学]	尾道大学の施設。尾道大学生や教員の作品を展示。

るのはその基本的機能である。ミュージアムに欠かせない展示機能に加え、フィールドミュージアムのガイダンス機能、まちづくり支援機能といった複合的機能を備えているのだ。

松山市は、坂の上の雲ミュージアムを建設するにあたって、松山のまち全体を「屋根のない博物館（フィールドミュージアム）」とするまちづくり構想を策定している。正岡子規や秋山兄弟が生まれ育った松山市には、正岡子規や秋山兄弟ゆかりの地や施設、小説に関係する場所などが数多く残っており、こうした魅力ある資源を発掘・再評価し、活用していくことでまちづくりを進めようというのが、『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想」だ。

そのために、坂の上の雲ミュージアムはフィールドミュージアム構想の中核施設として、市内に点在する情報を収集し、結びつけ、発信していくというガイダンス機能を果たしている。それとともに、伝統や文化を守り、新たな地域資源を生み出している市民主体の活動をより活性化するために、市民参加のまちづくり拠点として市民の取り組みも支援している。

坂の上の雲ミュージアムは、ミュージアム本来の機能に加えて市民主体のまちづくり活動の「拠点」となることで、その魅力と意義をより高めている。



株式会社ワンフィー 社長 河本弘文 《鳥取県米子市》

# 感謝と恩返しのできる気持ちこそが事業を支える

## 独立して人の世の温かさを実感

「うちのマンションの下水管理をやらないか」。その言葉を聞いた時、「エウ」と声を上げた。考えてもいなかった意外な言葉だった。それとともに、思わず臉が熱くなってきた。

長年にわたって多大な恩を受けながら、あえて独立の道を選択した自分である。そんな自分を今でも気にかけてくれる。そのことが嬉しかった。と同時に、握り締めた拳にぐっと力加わった。

「前の会社で恩義のある方がわざわざ私に仕事を発注してくれました。人の世の温かさを実感しました。この恩を返すためにも一生懸命仕事をしよう」と決意したのである。

今から約三十年前のことを思い出しながら、企業家はほんの少し空を仰いだ。その表情からは深い感謝の気持ちが伝わってくる。

鳥取県米子市の株式会社ワンフィーの河本弘文社長（69歳）である。髪の毛は白くなっているとはいえ、陽に焼けた顔はエネルギー溢れる企業家そのものだ。

## 自分には独立の道しかない

河本社長は一九三九（昭和十四）年に米子市で生まれた。家は農家で、六人

兄弟の四番目だった。高校を卒業すると地元ダンボール工場で働き、その後建材関係を扱う地元企業に就職した。建材を扱っているため、建設業を中心にさまざまな分野の人たちと一緒に仕事をし、交友を深めていった。河本社長はそこで築き上げてきた人脈を活かし、また周りの人たちにも支えられながら着実に業績を伸ばし、若くして常務になった。

そんな時だった。ある思いが河本社長の脳裏をかすめた。「先輩たちを見てみると、定年後はしょんぼりしているんですね。私も数十年後には定年を迎えるのですが、それはなりたくないと思いました。ではどうするか。考え続けた結果、私が選んだのは会社を退職して独立することでした」

しかし、現在の自分があるのは今の会社があってこそということもよく分かってきた。それでも、自分には独立の道しかない」と決意した。こうして河本社長と従業員一人の環境プラント工業株式会社が誕生した。

## 他社が手がけない仕事を受注

河本社長は独立する前から一つの経営方針を決めていた。それは、これまでお世話になった会社と同じ仕事はしないと決めたことだった。そこで着目したのが水処理関係の仕事だった。当時は、公共下

水道や集落排水などの普及とともに、排水の水質管理が強く求められてきた。河本社長はそこに新しい事業の可能性を見出したのである。

しかし、すでに水処理関係の事業を展開している企業も多かった。いくら市場の成長性が見込めるとはいっても、創業したばかりの小さな会社がすんなり事業を始められるものではない。そんな時に、前の会社で恩義のある方がマンションの下水管理の仕事が発注してくれたのだ。それは、創業したばかりで不安もあった河本社長にとって非常にありがたかった。

マンションの下水管理をしながら、河本社長は水処理関係の仕事を探し続けた。しかし、なかなか仕事は受注できなかった。水処理は受注業務であり、施設の管理者から信頼されることが何よりも必要である。実績が大きなポイントになるのだ。では、創業したばかりの小さな会社が仕事を受注するにはどうすればよいか。河本社長は悩んだ。

「そこで得た結論は、技術的にも高度で、他の会社が手がけない仕事を積極的に受注することです。いわばマッチで、なかなか参入できない業務をターゲットにしたのです」

といつても、環境プラント工業に他社を圧倒するような高度な知識や技術はなかった。そこで、河本社長自ら現場に

profile

河本弘文 かやもと・ひろふみ

1939年鳥取県米子市生まれ。高校を卒業後、米子市内の会社に勤務。その後、1985年に環境プラント工業株式会社を設立し、社長に就任。2001年にはペットフードを製造販売する株式会社ワンフーを設立した。環境プラント工業グループは、従業員数は70名、売上高は11億円である。

文：城市 創（鳥根県益田市出身） 写真：白根俊彦（米子市在住）

足を運び、泥だらけになりながら施設の  
問題点を明らかにするとともに、神戸  
や広島にある水処理施設のメーカーにも  
行って技術者と一緒に議論し、問題点を  
確実に解決していった。

休日もないような働きぶりは河本社長  
の体に大きな負荷を与えていた。創業か  
ら一年半後、肺炎を患うとともに、疲  
れから目にも異常が生じた。それでも会  
社を休むことはできないため、通院しな  
がら肺炎の治療を受けた。しかし、目の  
異常はどうすることもできず、結果的に  
片方の目はほとんど光を失ってしまっ

## 世界トップクラスの技術で 安全と信頼を確保

こうした努力は着実な実績となり、  
環境プラント工業は事業を拡大してい  
た。それとともに、世界的にも高い技  
術を積極的に導入した。特に、行政か  
らは一般不燃物最終処分場の委託業務  
を受託した。最終処分場の業務を民間  
企業に委託したのは全国でも初めてで、  
操業開始とともに全国からの視察が相  
次いだ。  
「こうした処理施設には世界的にもト  
ップクラスの技術を導入しており、そのた  
めに「処理や水処理の先進国であるド  
イツには頻繁に足を運び、常に最新の情  
報を得るようになっています」

## 店頭販売から ネット販売に切り替える

ワンフーを開発することはできたが  
それをどう販売するかは大きな課題で  
あった。多くの人がペットフードを購  
入しているのはスーパーマーケットやホ  
ームセンターなどである。そこで、河  
本社長はさっそくスーパーマーケットに  
足を運び、扱う商品を決定するパイパー  
にワンフーのメリットを訴えた。パイパー  
のもとには全国からたくさんの商品が  
持ち込まれており、河本社長がいく



いずみの苑の玄関に柔らかな表情で立つ河本社長

例えば、さきほどの一般不燃物最終  
処分場では日本で初めて逆浸透膜の技  
術を導入した。最終処分場では焼却灰  
や不燃残さが埋め立てられており、無  
機塩類や難分解性有機物の比率が高  
い。そこで導入したのが逆浸透膜を使  
った水処理である。これまでの水処理  
は生物処理が中心であったが、逆浸透  
膜は膜を通して無機塩類や難分解性  
有機物などを処理するものだ。したが  
って、処理した水は超純水と同等な水  
質を保っている。

そうした企業の姿勢を支えているの  
は「やらねばならない」という気持ち  
だ。「処理施設などは住民からすれば  
「迷惑施設」と思われがちである。だ  
から、常に最高の技術を導入して安全  
性を高め、信頼を得ることが必要な  
のだ。

## 愛すべきペットの 健康が乱れている

河本社長は幼いころから動物好きで、  
日本警察犬協会のシェパード歴代チャン  
ピオンも数多く育ててきた。シェパ  
ードは河本社長の人生にとって不可欠  
な存在となっていた。自宅で二十頭を  
超えるジャーマン・シェパードを育  
てているが、生まれてくる純血種のシ  
ェパードを売ったことは一度もない。  
大事に育てたいという人が、それが  
できる環境にある人にだけ幼犬を譲  
っている。

けんもほろろだった。それでも人脈も  
フルに活かして働きかけ、何とか店  
舗に並べてもらったことができた。

しかし、そこで大きな問題が生じた。  
ワンフーにはもちろん賞味期限がある  
が、スーパーマーケットなどから期限  
切れの六カ月前には値下げが引き揚  
げを求められたのだ。

「ワンフーには安全性を確保するため  
に防腐剤は入れていませんし、他のペ  
ットフードに比べて原材料費は非常  
に高くなっています。したがって、値  
下げや引き揚げはとてできないこと  
でした」

そこで河本社長が決断したのはス  
ーパーマーケットなどから撤退し、  
ネット販売に切り替えることだ。ネ  
ット販売を行うためには、積極的に市  
場を開拓することが必要だ。そこで  
河本社長はペット愛好者を招いてホ  
テルでプロモーション活動や勉強会  
などを継続的に行った。その結果、  
ワンフーを利用するペット愛好者  
が着実に増加するとともに、コ  
ミュニティが広がった。「ワンフー  
は良いよ。食べさせてもらって」  
といった会話が愛好者たちの間に  
頻繁に交わされるようになり、現  
在では北海道から沖縄までワンフ  
ーの愛好者がいるまでになった。

現在、ワンフーは米子市にある工場  
で製造されている。出来立ての新鮮な



漢方食材を用いたペットフード「ワンフー」

しかし、ペットには大きな問題があ  
った。下痢をしたり、病気がかか  
ったり、最後はガンでなくなるペ  
ットが非常に多いのだ。「どうして  
だろつか。それを考えていくと、  
ペットフードの問題があるのではな  
いかと思ったのです」

実際、市販されているペットフード  
を調べてみると、原材料が明記され  
ていないものが多いことに驚かされ  
た。自分たちはペットと暮らすこと  
によって心を癒やされている。それ  
ならば、ペットが健康に暮らせるよ  
うなフードを与えることは自分た  
ちの責務ではないか。河本社長はそ  
う考えたのだ。それはペットへの  
恩返しでもある。

そこで河本社長は自ら良質な食品を  
作ることに決意した。自然の中では  
犬や猫はワサギや小鳥といった小動  
物を食べている。地元企業として、  
鳥取県から安全なペットフード「  
ワンフーブランド」を世界に発信す  
ること。それが河本社長の夢であ  
る。

## 高齢化が進む地域にも 恩返しをしたい

一九九九年（平成十一年）、河本  
社長は社会福祉法人ソエルよどを設  
立し、妻木晩田遺跡で有名な米子市  
淀江町に特別養護老人ホームいず  
みの苑を建設した。「一般不燃物最  
終処分場建設にご理解いただき、快  
諾してくださった住民の皆さんに  
少しでも恩返しをしたい。高齢化が  
進むなか、介護が必要になっても  
住み慣れた地元で生活できる場所  
が必要だと思いました」

いずみの苑は現在、利用者のニーズ  
に合わせて高齢者向け優良賃貸住  
宅、ケアハウス、デイサービスとい  
った施設で構成されているが、建設  
にあたっては、広々とした敷地の中  
で、地の物を食べ、温泉に浸かっ  
てゆったりと過ごすこともできるよ  
うにしている。すべての施設で利用  
できるようになっている。

いる。そこで小動物の肉や穀物など  
を使ってペットフードを作ってみた。  
すると、利用者から毛の艶が良くな  
った、皮膚病が治ったといった声  
が寄せられた。

## 漢方食材で 自然治癒力を高める

さらに、河本社長が着目したのは、  
生き物に有用な漢方食材を取り入れ  
て、ペットが本来にもっている自然  
治癒力を目覚めさせることだ。そ  
こで、漢方の本場である中国に渡  
り、リサーチを重ねた。その結果、  
吉林省の長春農牧大動物科技学院  
（現吉林大学畜産獣医学院）が漢  
方を研究しており、同時に日本の北  
里大学獣医学部とも交流しているこ  
とを知った。

河本社長はさっそく長春農牧大動  
物科技学院を訪れ、自分の思いを熱  
く語った。その熱意が通じて、共  
同で新しいペットフードを開発する  
ことになった。こうして開発され  
たペットフードが「ワンフー」であ  
る。

ワンフーの原材料は、健康なワサ  
ギと鳥の肉、低農薬で栽培した野菜  
と米、そして薬膳などの漢方治療に  
使われる自然治癒力を高めるとい  
われる中国ハーブである。人工の保  
存料、着色料、抗生物質、酸化防  
止剤、遺伝子組換え作物は一切使  
っていない。さらに、原材料名を

理事長でもある河本社長は毎日施設  
に足を運び、入居者や職員たちに  
声をかけている。その表情は、感謝  
の気持ちである。柔らかさに満ち  
ている。

さらに、掘った温泉の豊富な湧出  
量を活かし、入居者のみならず一般  
の人にも広く利用してもらいたいと、  
二〇〇二年（平成十四）年には温  
浴施設「ラビスパ」を建設した。南  
欧をイメージした「かけ流し型」  
天然温泉は幅広い年代層に人気  
である。

こうした施設は、山陰自動車道  
淀江インターチェンジを下りてす  
ぐ、大山麓の豊かな自然のなかに建  
つており、目の前には四季折々の美  
しさが楽しめる大山の峰が広がる。  
その姿を見上げる河本社長の表情  
は、まるで五月晴れの空のように  
さわやかであった。



地元の人たちから親しまれている温泉施設「ラビスパ」  
（写真提供：環境プラント工業）

# 医師不足のなかで地域医療を支える「ミュー太」

〈島根県〉

遠隔操作ができるロボットで入院中の児童を支えようという産学官の取り組みは、医師不足に悩む地域医療を支える新しいシステムへと成長していった。



地域医療を支えるミュー太と、島根大学産学連携センターの中村教授

## 自由自在に 遠隔操作ができるロボット

疾患などで長期入院している児童の大きな不安の一つは学校の授業を受けられないことである。そんな不安を少しでも解消するために院内学級を設置している病院もあるが、残念ながら授業内容は十分に満足できるものではない。児童には、同級生たちと机を並べ、先生の話と一緒に聞けるような「場」が不可欠なのだ。

これを利用すれば入院している児童があなたも教室で授業を受けているような体験ができるというものだった。「さうそく近くの塩冶小学校と出雲市に相談した結果、両者とも非常に協力的でした。また、企業も積極的に参画してくれて、産学官の共同研究がスタートしました」

こう語るのは産学官連携の窓口となった島根大学産学連携センターの中村守彦教授である。島根大学産学連携センターは松江市の「テクノアークしまね」と出雲市の医学部内の二カ所に設置されているが、中村教授は医学部内の専任スタッフである。産学連携で医学系の専任教授がいるのは全国でも島根大学だけである。

## 児童の「代理人」の 役割を果たすロボット

共同研究のテーマは、「院内学級向け児童用タブレットロボットの開発」である。「タブレット」という言葉を使ったのはロボットが児童の「代理人」の役割を果たすことを強調するためである。

開発されたミュー太のシステムは、病院と学校に設置したテレビ付きの端末機をインターネットで接続し、病院側の端末機にあるコントローラーを操作すれば、学校側の端末機にあるカメラが上下左右

に旋回し、病院の児童が見たい場所を映し出すことができるものである。また、オプシオンの液晶タブレットを使えばプリントのやりとりや書き込みなどもできるし、挙手したい時にはランプで教室のみんなに知らせることも可能である。

島根大学医学部ではミュー太を使った授業も行ったが、予想以上に学校側の負担も大きく、定期的に行うにはまだまだ課題も多かった。しかし、ミュー太を実用化することによって、医療そのものへの活用も検討された。そこで着目したのがミュー太を使って遠隔医療を行うことだった。

## 遠隔医療への活用で 地域医療を支える

医師不足は日本全体の課題となっているが、島根県でも西部や隠岐、中山間地では深刻な状況になっている。そこでこのシステムを活用して、専門医のいない病院と島根大学医学部に端末機を設置し、患者さんを地元の病院で診察しようとしているのだ。

例えば、皮膚に疾患がありながら地元の病院に専門医がいない場合、患者さんは地元の病院内で他科の医師と一緒に端末機の前に座る。一方、島根大学医学部では皮膚科の専門医が端末機の前に座り、コントローラーを操作したり、

マイクで問診などをして患部を診断し、他科の医師にカルテを書いてもらう。

この場合、医師法では医師免許を持つていけば医療行為はできるため、法律的にもこうした遠隔医療には問題はない。それ以上に、患者さんにとって隣に医師がいることが大きな安心感につながっている。

島根大学医学部では、すでに益田市と隠岐の島町、大田市、邑南町の病院内に端末機を設置し、医師不足のなかで地域医療に大きく貢献している。

## 産学官連携の取り組みを 生きた科学にする

こうしたミュー太の機能は高く評価され、中小企業異業種交流財団が募集した二〇〇七年度異業種交流成果表彰で優秀製品賞を受賞した。成果表彰は一九八九（平成元）年度に始まったが、山陰両県での受賞は初めてである。

こうした産学官連携の取り組みを生きた科学にすることも産学連携センターの

そうした課題を解決するために産学官連携で開発されたのが双方向遠隔通信システム「ミュー太」である。開発したのは島根大学医学部と山陰電気株式会社、有限会社小村産業、株式会社ワコムアイティで、出雲市も助成などを行っている。島根大学医学部の前身は一九七五（昭和五十）年に開設された島根医科大学で、二〇〇三（平成十五）年の島根大学との統合で現在の機構に変わった。

開発のきっかけとなったのは、二〇〇三年に島根大学医学部付属病院の花田英輔准教授が島根大学医学部地域医学共同研究センター（現在は産学連携センター）に双方向通信ロボットの活用を相談したことだった。花田准教授は情報工学や通信工学などを専門とする工学博士で、付属病院では医療情報などを担当している。

花田准教授の双方向通信ロボットは自由自在に遠隔操作ができるロボットで、重要な役割だと考えて、高大連携にもつなげています」と、中村教授は言葉を続けた。

近年では高校生の理科離れが指摘されている。そこで、少しでも科学に興味を持つてもらうために、理数系の高校生に実際にミュー太を操作してもらうことも、開発者に講義してもらっているのだ。参加した高校生たちには非常に好評で、強い関心を持って講義を受けている。また、引率する教師にも強いインパクトとなり、理科教育のモデルにしたいという声も寄せられている。

産学連携センターでは、こうしたフィールド学習を行うことにより、一人でも多くの生徒に医学への興味を持たせ、最終的には地域医療を支える人材育成にも貢献したいと考えている。

長期入院の児童のために開発されたミュー太は、関係者の熱意に支えられながら、高校での理科教育や地域医療そのものにも貢献しようとしている。



自由自在に動くカメラで映像を送信する。



教室の雰囲気を出すように木材を使ったミュー太

# プラスチック再生測量杭で国土インフラを支えるリプロ

〈岡山市〉

地籍調査や土木工事に欠かせない測量杭。独自の技術でプラスチック再生測量杭を開発したりプロは、技術の進化に対応しながら国土インフラを支えている。

## 遅れている地籍調査に不可欠な測量杭

道路や路地などを歩いていると、ときどき足元に目印のようなものがある。これは測量杭と呼ばれるもので、土地の戸籍となる地籍調査や土木工事などで使われている。これで所有する土地の境界が確定されるため、公共的にも非常に重要なものである。

この測量杭に全国で初めて再生プラスチックを導入し、高い市場シェアを確保しているのが、岡山市の株式会社リプロである。

リプロの創業は一九七二（昭和四十六）年である。創業者である岡田巧社長は兄の経営する樹脂包装印刷メーカーに入社していたが、扱っているプラスチックの再生を事業にしようとしてリプロを設立した。当初は、製鉄所などで使う鉄板用枕木などを生産していたが、そのうち自社企業の製品開発を模索するようになった。そこで着目したのが国土調査に使われる測量杭だった。

成型、冷却の一貫システムを独自に開発し、他社よりも安く大量に生産できる体制を構築した。

こうして、リプロは市町村が行う地籍調査にターゲットを絞り、サンプルを持つて全国の自治体を回った。

リプロが高い市場シェアを確保するうえで強い競争力となったのは、プラスチック再生加工業界では初めてJIS（日本工業規格）の認定を受けたことだ。測量杭は公共的なものであり、そこには一定の品質基準が必要である。しかし、廃材を加工するプラスチック再生加工では認定する条件が難しいためJISは制定されていなかった。

そこで、リプロは自分たちでマニュアルを作成するなどしてJISの必要性を訴え続けた。その結果、一九八三（昭和五十八）年にはプラスチック再生加工のJIS規格が制定され、三年後にはリプロは業界で初めてJISの認定を取得した。この認定により市場から高い信頼を得るようになり、市場シェアの拡大に大きく貢献していった。現在は、国際規格のISO9001とISO14001を運用し、高いリサイクル品質を継続している。

## 測量杭の高付加価値化で社会に貢献

プラスチック再生測量杭を安定的に

日本では一九五二（昭和二十七年）年に国土調査法が制定され地籍調査が始まったが、土地をめぐってのトラブルが多いことから境界確認が難しく、現在でも地籍調査は国土の約五〇%しかできていない。それに対して欧州各国では一九八〇年代までに全国土の地籍図画が完成し、二度目の調査も始まっていた。それだけ日本の地籍調査は遅れているのである。

「当時の測量杭のほとんどは木製がコンクリート製でした。木製は燃えたり朽ちたりしますし、コンクリート製は丈夫ですが作業が大変です。そうした欠点を再生プラスチックはカバーできます」と、岡田社長は当時を振り返りながら語った。

## 業界初のJIS認定で高い信頼性を確保

しかし、問題は再生プラスチック測量杭の安定的な生産だった。当時はプラスチックを再生して測量杭を生産する技術などなかったし、もちろん専門のメーカーもなかった。そのため、破碎から溶融、

生産するとともに、今後の成長に向けたテーマとして掲げているのが測量杭の高付加価値化である。その一環として開発したのがICタグを埋め込んだ情報杭だ。

ICタグは、メモリー機能があるICチップと小型アンテナで構成され、専用の読み取り機を使って無線でICチップと通信できるものである。ICチップに座標や地目、所有者などの情報を記憶させておけば、現場で携帯電話や情報端末からいつでも情報を検索したり、ダウンロードできる。リプロはすでに十数年前に情報杭の特許を取得しており、二年前からは国土交通省にも採用され、国道に敷設され始めている。

また、二〇〇七（平成十九）年には大日本印刷株式会社などと共同で、インテリジェント基準点向けにICタグを開発した。これはエンジンリングプラスチックを活用した、高い耐久性を有するICタグだ。インテリジェント基準点は、国土地理院が規定した測量用基準点の名称で、従来の基準点にICタグを組み込み、個々の位置情報を情報杭に記録することで生活支援やメンテナンス履歴、測量の効率化を図るというものだ。

さらに、二〇〇七年には杭にセンサーを埋め込んだ、現場での動体調査型「情報発信杭」も開発している。これは温度

や角度などの変化をセンサーがキャッチし、その情報を管理端末などに送信するものである。例えば、これを傾斜地に設置しておけば、大雨の後でも、わざわざ現場に行かなくても傾斜地の異常を把握することができ、安全・安心に大きく貢献すると期待されている。



プラスチックをリサイクルした境界杭（写真提供：リプロ）



携帯電話でも情報を入力できる情報杭®（写真提供：リプロ）



国土インフラを支える道路基準点などにもリプロの製品が活躍している。（写真提供：リプロ）





# 古民家の再利用で 省エネ住宅のあり方を提起する NPO法人日本古民家研究会

《島根県松江市》

地球温暖化の大きな要因とされる二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の削減は、産業界だけでなく、国民一人ひとりの課題でもある。そのために、日々の生活を見直し、少しでもCO<sub>2</sub>を削減しようという動きも活発化している。そうしたなかで、古民家を利用することでCO<sub>2</sub>を削減しようという活動が注目されている。活動を積極的に展開しているのは島根県松江市のNPO法人日本古民家研究会である。

日本古民家研究会が定義する古民家とは、金具などを使わない木組みで、

1945(昭和20)年以前に建築されたものだ。県内を調査したところ、約18万棟あることがわかった。これは県内全戸数の約70%である。こうした古民家のほとんどは新築する時に解体されており、平均的な50坪の民家で50トンのゴミとなる。しかも、そのうち30トンは木材で、それを焼却すると15トンのCO<sub>2</sub>を排出していることがわかった。本来なら、CO<sub>2</sub>を吸収すべき木材が、焼却されることにより、逆にCO<sub>2</sub>を排出しているのだ。

「昔は、本家が新しい家を建てると、旧い家は分家に移築されるなど、住宅のリサイクルがあたりまえに行われていました。そこで、もう一度原点に戻って省エネにつながる住まいのあり方を考えようとなったのです」と、日本古民家研究会の成相脩理事長は語る。

それが、財団法人島根ふれあい環境財団21(現在は財団法人三瓶フィールドミュージアム財団)が2005(平成17)年度に取り組んだ「山陰の風土に適した省エネ住宅マニュアル」の作成だ。そこでは、歴史的に育まれてきた土壁や土間といった建築技法にスポットをあてながら、それを現代に活かすことで省エネを実現しようという提案がなされている。

さらに、こうした取り組みを活かすために、日本古民家研究会では実際に古民家を再利用した「緑の宿プロジェクト」も展開している。これは、借りた古民家を改修して、一日一組の「宿」として提供するものだ。その第1号はすでに松江市の代表的観光スポットである武家屋敷の近くにオープンしており、ほぼ毎日予約が入っている。

「古民家を利用して新しいことができる。そのことを示すことで、古民家の再利用、さらにはCO<sub>2</sub>の削減を進めていこうと考えています」と、成相理事長。こうした日本古民家研究会の活動は海外からも注目され、今春のエチオピアに続いてフランスにも古民家が移築される。

日本の原風景ともいえる古民家は、海を渡って、まさに地球規模で環境に貢献しようとしているようだ。



古民家を現代的に再生した住空間

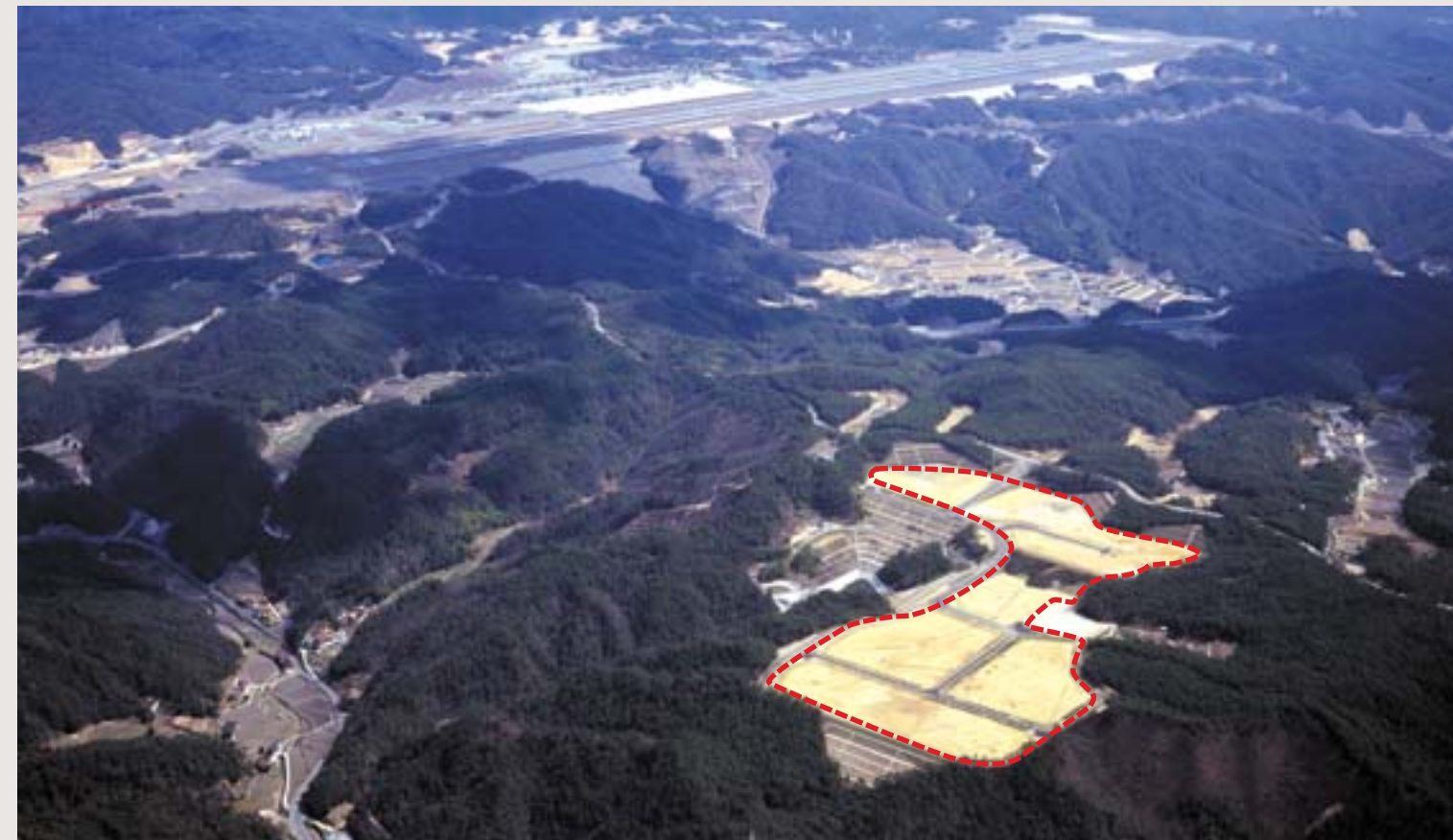


松江の武家屋敷近くにオープンした「緑の宿」

# 竹原工業・流通団地

《広島県竹原市》

新たな産業集積を目指す団地



## 特徴

- 1. バランス良く整備された交通アクセス**  
 広島空港から3km  
 山陽新幹線東広島駅から17km  
 山陽自動車道河内I.C.から5km  
 国道2号から4km  
 竹原港から15km
- 2. 緑豊かな自然と温暖な気候**  
 緑の丘陵地に広がり、瀬戸内海の温暖な気候に恵まれています。
- 3. 充実した優遇制度**  
 広島県企業立地促進助成制度  
 設備投資額に対する助成:設備投資額の20%(限度額5億円)  
 土地取得に対する助成:土地代金の25%  
 広島県工場立地促進融資制度  
 所要額(土地取得費を含む)×65%(限度額3億円)  
 竹原工業・流通団地事業所立地促進条例  
 事業所設置奨励金:3年間の固定資産税額相当額(限度額合計5億円)  
 雇用奨励金:新規雇用従業員数×15~20万円(限度額2,000万円)  
 土地取得奨励金:取得面積に応じて土地代金の5~10%  
 施設整備奨励金:設備投資額(土地代を除く)の5%(限度額5,000万円)



## お問い合わせ先

広島県商工労働局企業立地課 TEL (082) 223-5151 メールアドレス: syokigyou@pref.hiroshima.lg.jp  
竹原市産業文化課 TEL (0846) 22-7745 メールアドレス: sanbun@city.takehara.hiroshima.jp

詳しくはホームページをご覧ください。 URL : <http://ricchi.hiwave.or.jp/ricchi/>

# 大けがをバネに人と人との 「あつたかい交流」を育む白松博之さん

中国山地の山あいで農家民宿を営む白松さんは、古き良き日本の「田舎の良さ」を上手に残しながら、一方で地域の経済的発展や田舎と都会に住む人々との交流をさらに盛んにするために骨を折ってくれる頼もしい世話役さん。同じ夢を持つ仲間とともに、肌で感じる農村体験や家づくりなど、さまざまなジャンルでユニークなアイデアを実践中だ。



## profile

### 白松博之 しまつ・ひろゆき

1946年山口県阿武町生まれ。農林業に勤んでいたが、大けがを契機に山口県初の農家民宿「樵屋」を始めるとともに、有限会社あつたか村を設立し、地域振興や田舎と都会の交流などを図っている。

文：藤沢享乃（広島市在住） 写真：岩本倫忠（広島市在住）

## 十一年前に起こった アクシデント

今年六十二歳になる白松博之さんの半生は十一年前の事故によって大きく変わった。以前は、五人兄弟の長男として家業である農林業を支え、県下でも一、二位という規模にまで事業を拡大した。地元出荷の農産物の半分は白松さんが経営する畑からで、パート社員も数多く抱えていた。「俺がこの地域の農業や林業を引っ張っていくんだ」。そうした気概を持って毎日、懸命に働いていたという。

ところが、畑で防風林の枝打ち中、突然、支えとした杉の枝が折れ九mもの高さから落下するといつアクシデントが起きた。一命はとりとめたものの脊髄を損傷してしまい、一人では寝返りさえ打てない体になってしまった。

働き盛りで、しかも手がけた事業は成功し、これからもっと大きなことをやっつけてやるという希望に燃えていた時である。置かれた状況のあまりの落差に、毎日、「何もできない体で生きていかななくてはならないのなら、いっそ死んだ方がましだ」と思ったことも一度や二度ではなかった。

「このまま飛び降りたら、楽になれる。そんなことはかり考えていました。だけ

ど、動けないから飛び降りることもできなくてねえ」と、白松さんはさらりと振り返る。痛みさえも感じない自分の足に、初めて「無感覚」でいることの虚しさ、恐ろしさ、焦りを感じたという。まさに「空虚」そのものだった。「だけども、じつと天井を見つめて過すうちに、『なぜ、自分はまだ生きているのだらう?』と考えるようになったのです。時間だけはたっぷりあるので、とにかく自分自身に問いかけました。そして辿り着いた結論が『きつとまだやり残したことがあるから、神様が自分を生かしてくださったのだ』ということでした」

あまりにも哲学的な境地だが、動けぬベッドの中で白松さん自身が導いたのがこの思いだった。

そう思うと、もともと行動派の白松さんは、今までの時間を取り返すかのようには流れてパソコンを覚え、リハビリに汗を流した。パソコンの実力は、「緑の森からの宅急便」というホームページを開設して世界中に発信できるほどの腕前に上達した。体力も回復し、車イスで自在に動けるほどの筋力も取り戻した。そして、二〇〇五（平成十七）年には奥さんと一緒に山口県で第号となる農家民宿「樵屋」を開いた。白松さんの家では、毎年、収穫が終わると家族全員で二泊三日の旅行を楽しんでいた。

無事に収穫できたことへの感謝と、忙しくてかまっていられなかった子どもたちとの絆を深めるための旅行だった。

一泊目はキャンピングカーに、二泊目は民宿に泊まるという質素な旅であったが、家族の温かさ、大切さを家族全員で共有でき、本当に楽しい旅であった。白松さんは、そんな旅の温かさを多くの人たちに味わってもらいたいという気持ちから農家民宿を開いたのだ。

## パソコン仲間と協力して 「あつたか村」を設立

現在、白松さんの活動の中心ともいえる有限会社あつたか村は、「緑の森からの宅急便」というホームページを起点としたパソコン仲間とのオフ会が発端だ。インターネット上ではなく、直接顔を合わせるオフ会での意見交換を通して、会員たちは「田舎こそが我々の理想郷ではないか?」との思いを強くした。

そこで、賛同した仲間が出資して町内の山林や空き地を買い、木材加工センター、手づくりログハウス、事務所などを建設した。そして、ヤギの飼育やソバ栽培などを始め、ここから「人に優しく、自然に優しい事業」を興すことにした。

例えば、あつたか村では地元木材百%使用の木工品やログハウスをつつてい



地元の木材を使った看板がお客様を迎える樵屋

る。ログハウスは、あつたか村の木材加工センターで加工した木材を現地に運び入れ、そこで組み立てる。たとえ換気扇の枠組であっても既製品は使わず、すべて地元産木材を使うという念の入れようだ。塗料は柿やひまわり油を原料とした自然のものを使用し、化学薬品は一切使わない。そのため、あつたか村のログハウスは化学物質過敏症などの人々向けの住宅としても注目を集めている。そのほか、婚礼の引き出物から日用雑貨品に至るまで、数多くの木工品の注文を受けている。

また、トイレの汚水にしても、浄化センターで薬品によって分解して再利用するのではなく、タンクで自然に分解された水が地下管を通じてそのまま畑に



佳味彩々

8

# 津田かぶ

《島根県松江市》

松江市周辺で栽培されている赤いかぶ。その外見上の特徴は、**勾玉**のように曲がった形状と、上部は赤く尖端にいくにしたがって白くなる外皮だ。原種は滋賀県日野町で栽培されていた日野菜かぶで、江戸時代の参勤交代の折りに持ち込まれたといふ。その後の品種改良で、現在の独特のかぶとして完成した。旬は秋から冬にかけてで、収穫の最盛期は十二月。やわらかな肉質に独特の香りと甘みがあり、主に漬物として食されている。

名前にある「津田」は産地を示す。松江市の東部に位置する津田地区は、宍道湖の有機物を豊富に含んだ肥沃な土壌に恵まれ、江戸時代には城下で消費する野菜類のほとんどをまかっていたといわれる。津田かぶは、この豊かな地で開発されたためか、他の土地ではうまく育たないことが多いという。まさにこの地ならではの特産品だ。栽培、収穫に手間がかかるため、一時期生産農家が激減したが、近年、作付けの拡大や収穫期間の延長など研究が重ねられ、徐々に生産量が増えている。

代表的な加工品は糠漬けである。その工程は今も昔も変わらぬ手作業による。収穫した津田かぶを葉つきのまま洗い、天日に干すことおよそ一週間。「はで」と呼ばれる木組みに、赤いかぶと緑の葉



津田かぶの漬物

がコントラストも鮮やかに並ぶ情景は、松江の初冬の風物詩でもある。この時期、日本海からの冷たい季節風が葉の青さを保ちながらかぶをほどよく乾燥させる。余分な水分が抜けたところで、さらに一週間、糠と塩で漬け込む。こうして収穫から約一週間できあがりとなる。切り口は赤と白が目まぶしい。好みにもよるが食べごろは一月ほどたつてからという。糠漬けだけでなく、浅漬けや酢漬けなどにも加工される。

この地域ではお茶を好むため、昔ながらに「茶口（ちゃぐち）お茶受け」として親しまれているの菓子や漬物」として親しまれているほか、贈答用としての人気も高い。



笑顔を絶やさない白松さん

還元するという「外に流さない水洗トイレ」というシステムを採用している。端的に言えば、昔のように人糞を畑の肥やしにして再利用しようという発想だ。ただし、昔なら直接、人糞を畑にまいていたところを、地下から密かにまくというのがミソ。自然の法則に沿った汚水処理だから、環境に優しい。今後、こうした発想がビジネスとして成立する日も近いかもしれない。さらに、あつたか村は、製造販売だけでなく、日々ハウスづくりや山菜採り、野菜の収穫体験の場などとしても利用されている。

あつたか村体験の特色は、実際の生活に根ざした体験ばかりだということ。ここでの先生は白松さんたちだけでなく、町内のお年寄りなどにも参加してもらい、それぞれの得意分野のコツを伝授してもらっている。山、畑、山草、鳥、虫などを直に触り、見て、音を聞き、においを嗅ぎ、味わえるといった五感を総動員した体験ができる。

**地域が良くなるらないと自分の暮らしも良くなるらない**

「よくボランティア精神にあふれていて立派だと言われるのですが、そんなんじゃないです。周りに活気がないと私自身も楽しくないし、豊かな気持ちになれない。だから、自分のために、周りの人々を巻きこんで、まちおこしや田舎と都会のネットワークづくりなどをしているだけ。すべては自分のためです」と、白松さんは照れくさそうに笑った。

そんな姿に「情けは人のためならず」の格言がふと浮かんだ。田舎でがんばる人、田舎に憧れる都会の人、自然が大好きな子どもたち、地域復興のために汗をかいたあつたか村の仲間たち。さまざまな立場の人の接点となり、みんなをまとめて上げているのが白松さんだ。そんな世話を一手に引き受けながら、「自分が楽しく生きるために、自分のためにやっているだけ」と言い切れるところが、白松さんの懐の深さである。

例えば、田舎の自然を愛する人々が会員となる「山里フォーラムのんたの会」では、都会に住んでいるため現地にはなかなか顔を出すことのできない人、実際に農地で働く人、たまの休日だけ労働に来る人など、さまざまな立場の人がいる。それでもみんな仲良く会を

運営できているのは、白松さんのサポートによるところが大きい。

白松さんは、都会の人には「田舎には田舎のルールがあること」をまず伝える。そして、田舎のルールを守ることが約束してもらった上でなければ会員としては認めない。一方、田舎に住む人々には、なるべく一緒に一軒一軒あいさつに行き、直接、地元の人たちと顔合わせをするようにしている。

「顔が見えないと、憶測や噂が立ちやすいのです。だから、まずその人となりを覚えてもらいます」と、白松さん。せつかく憧れて都会から田舎へ遊びに来たり、農業を始めたのはいいが、人づきあいがうまくいかずに田舎に失望したという人の話も多い。それはお互いの誤解が生んだ悲劇だと白松さんは分析している。

面と向かって、お互いがお互いを認め合えば、相乗効果でもっと新しいメンバーが生まれてくる。そんな信念を持っているのだ。だから、白松さんは「田舎で癒やされたいと思ってやって来る人たちを温かく迎えるだけではなく、私たちがのほろでも彼らからいろいろなことを学びたい」という姿勢でいます。そのようにお互いが刺激し合える、持ちつ持たれつの関係こそが理想的な関係です。これからも、このような輪をどんどん広



「優しさの拠点」となっているあつたか村の施設

藤沢享乃 ふじさわゆきの  
鹿児島県生まれ。フリーライター。大学卒業後、出版社勤務を経て、広島でフリーライターに。企業PR誌、行政グラフ誌など、地元根ざした取材記事を執筆している。

げていくつもりです」と語る。

自分の人生をポジティブにしてみたいと思ったり、一度、あつたか村を訪ねてみるというかもしれない。そこには、予想もしていなかった新しい発見があることだろう。

# 頼久寺庭園

《岡山県高梁市》

臨済宗永源寺派に属する頼久寺（正式名・天柱山安国頼久寺）は、その草創は不詳であるが、南北朝時代、足利尊氏が諸国に命じて安国寺を建立した際に再興され、備中の安国寺と号した。永正年間（一五〇四～一五二一年）に備中松山城城主上野頼久が大檀越となり寺観を新、その没後、安国頼久寺と改称されて今に至る。備中西国第五番札所、瀬戸内観音霊場第十三番札所でもある。

庭園は小堀遠州（政一）の手による蓬萊式枯山水庭園である。茶道、建築、築庭の巨匠として名を馳せた遠州の初期の庭園として名高い。備中国奉行であった父政次の遺領を継いだ遠州は、松山城が兵乱によって荒廃していたため頼久寺を仮の館とし、一六一九（元和五）年ごろまでこの地にいた。作庭はその間になされたといわれている。

愛宕山を借景とし、書院の前に白敷砂で砂海をしつらえて、その中央に鶴島、後方に亀島を配する。鶴島は三尊の石組を中心に、周囲にサツキの刈り込みをめぐらせて中島景観を表し、亀島は亀の姿を表している。

鶴島を正面にして左手にあるのは、この庭園の中でも最も特徴的な「青海波を表現したサツキの大刈込み」である。このように刈り込んだ生垣を背景に鶴亀両島を庭園の主体にする様式は桃山時代から江戸初期に好まれた築庭様式ではあるが、頼久寺のそれは特に見事である。

五月半ばのツツジが咲き始めるころから、六月初めのサツキが満開になる季節が最も美しいとされるが、秋の紅葉、冬にかけて林泉に漂う霧、雪をかぶった景観もそれぞれに趣きが深い。一九七四（昭和四十九）年に国の名勝に指定されている。

檀越：施主のこと



愛宕山を借景に、手前に鶴島、後方に亀島が配置されている。



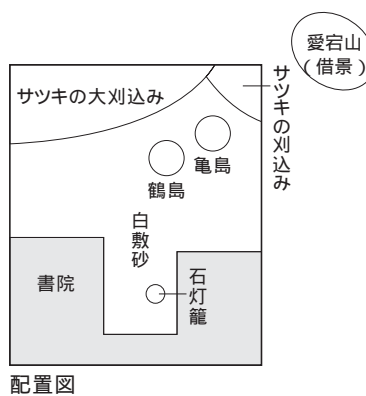
青海波を表現したサツキの大刈込み



石灯笼と白敷砂が静かな小宇宙を演出する。



高梁川を見下ろすように建つ頼久寺



## 工芸の旅 8

### 因久山焼

《鳥取県八頭町》

江戸時代に御用窯として保護されてきた因久山焼は、京焼と信楽焼の技法が混じり合った、独特の風雅さと土味のある作風が形成されている。鉄分を多く含む地元の土とさまざまな釉薬を用いた焼き物は、素朴でありながら高い格調をもち、多くの人から愛されている。



写真：井上耕之介（鳥取市在住）



「碧い風」VOL.63 2008年7月1日発行

発行人・岸本勝美 編集人・城市 創  
企画・発行・中国電力株式会社 エネルギア総合研究所  
〒739-0046 東広島市鏡山3-9-1 ☎082(420)0700  
[ホームページアドレス] <http://www.energia.co.jp/eneso/tech/index.html>

編集・制作・有限会社城市創事務所  
〒102-0073 千代田区九段北1-9-5-1003 ☎03(3234)4656